

日時：2017年1月16日(月) 10:40~12:10

場所：帝塚山大学

演題：「グローバル化と多様性—『バベルの塔の物語』の再考—」

講師：藤田 昌久（甲南大学特別客員教授）

今から1300年前、日本は、国際的な文化・文明が栄えるユーラシア大陸との交流が奈良を通じて行われたことによって、律令国家として発展を遂げました。その交流のおかげで日本にも独自の文明が開化し、ここに皆さんがいらっしゃるのです。これを念頭に置きながら、21世紀のグローバル化と文明の多様性の発展について、空間経済学の視点からお話しします。

近年、輸送技術と情報通信技術が飛躍的に発展し、経済のグローバル化が進展しました。生産・交易・投資のグローバリゼーション（脱国境化）と新しい産業集積や国際地域統合といったローカリゼーション（局地化）が進み、これらが密なネットワークでつながることで、経済社会システム全体が地球規模で大きく変わってきています。

アジアは今、「世界の工場」と呼ばれ、賃金格差を利用した生産工程により製造業が発展しています。また、21世紀は「アジアの世紀」といわれていますが、その実現のためには、「世界の工場」から、世界における「知識創造社会の中心」へと変革する必要があります。一番重要なのは、独自の新しい知識やイノベーションを生み出すことであり、それが将来皆さんに期待されていることでもあります。そのためには、アジアの経済統合を進めると同時に、アジアが持つ民族・言語・文化等の多様性を生かしながら独自の文明を創っていくことが必要だと思えます。これからアジア全体が知識創造社会として発展するためには、多様な人材と融合・協力していくことが重要です。

グローバル化は今、試練の下にあります。例えば、現在発効が赤信号となっているTPPについては、それを諦めるのではなく、アジア独自の地域連合を創っていき、それとTPPとを結びつけることが必要です。そして、これは将来の皆さんの課題です。皆さんは常にアジア全体、世界全体を見ていかなければいけません。

「多様性の中の統一」は、人類の永遠のテーマです。アジア全体で発展するためには、各国内部の閉じた政治的システムから広い地域における政治経済システムへの統一という課題と、アジア各国の多様な文化を生かしながら、その文化の融合によってさらに新しいレベルの

文明をつくるという一段高度で重要な課題、この両方を解決する必要があります。

知識創造社会における根源的資源は、皆さん一人一人の頭脳です。そして、多様性が本質的に重要です。もっと広い範囲で言えば、地域間の文化の多様性が異文化交流によって相乗効果を生みます。多様な頭脳から生まれる相乗効果を「三人寄れば文殊の知恵」といいます。しかし、それを長期的、同質的に行うと共通知識の肥大化が進んで固有知識が相対的に小さくなり、相乗効果が減退して、「三年寄ればただの知恵」になります。

日本では40年前前までは、東京に人が集まって非常に密な交流を行うことにより、蓄積型のイノベーションを行っていましたが、共通知識の肥大化が起り、経済成長率が低下しています。これからの日本が進めていかなければならないのは、バイオや情報通信、人工知能といった非常に大きなイノベーションにつながるような知の多様性の改善です。

この問題を解決するためのヒントを「バベルの塔の物語」から考えると、単一地域・単一言語のエンパイアに住む人類が高慢になり、怒った神によってエンパイアから追放され多地域・多言語の世界に住まわされるようになったのは、きっと罰に見せかけての天恵だったに違いありません。つまり、共通知識が肥大化し、知の生産性が落ちていく「三年寄ればただの知恵」の状態から、多地域・多言語であることで独自の文化が生まれ、それによってイノベーションにおける“いいとこ取り”ができる状態になったということなのです。

結論としては、「Let hundreds of towers bloom (100の塔に一斉に花を開かせよう)」、すなわち世界の多様な文化に根差した、それぞれの文化を代表したような素晴らしい塔を世界中で造っていくことです。それと同時に、われわれ人間が生かされている、地球全体のエコロジーの多様性も尊重しなければなりません。「Yes, we can!」で、「多様性の中の統一」を進めていきましょう。

